



写真 2011年2月11日「日本教育メディア学会」

題字・デザイン 吉田貞介氏

石川県教育工学研究会

2011.3.3

第80号

石川県における視聴覚教育80年の歴史と伝統を背景に

金沢市立米丸小学校長 三田村 英 明

昨年度、石川県小中学校視聴覚教育研究協議会は創設50周年を迎えた。そして、記念誌を昨秋発刊することができた。内容は、10年前の40周年記念誌以来の県大会の追想記が中心であるが、私の手元にあった「金沢市視聴覚教育・石川県視聴覚教育の変遷」も載せていただいた。これは、長年にわたり視聴覚教育に貢献された同研究協議会元会長の前田俊先生が昭和3年からの本県の視聴覚教育の歩みをまとめられたものである。昭和3年というと今から80年以上も前のことであるから、石川県の視聴覚教育の歴史を知ることのできる貴重な資料といえるだろう。

それによると、本県における視聴覚教育のスタートは昭和3年の金沢市児童映画会の設立に見ることができる。市の助役を会長とし、巡回映画会の実施のためにリヤカーでフィルムを運んだとの記述がある。昭和9年にはトーキーの試写会も行われている。そして、しばらくは映

画とスライドが視聴覚教育の中心であったようだ。戦時中のフィルム検閲や戦後の連合国によるフィルム没収など、その当時の世相も垣間見ることができる。

第1回石川県視聴覚教育研究大会が昭和37年に金沢市立長田町小学校で開催され、その後半世紀にわたり本県の視聴覚教育の牽引役を果たしてきたのである。当時すでに石川県放送教育研究会も発足し、昭和46年の第22回放送教育研究会全国大会金沢大会へとつながっていくわけである。この全国大会を契機とし、石川の地は全国的にも先進的な視聴覚教育推進地域として全国に名を馳せ、現在に至っているのである。そして、その伝統は石川県教育工学研究会の研究活動に確実に受け継がれ、石川の名を全国に知らしめていると言っても過言ではないだろう。新しい研究・実践への果敢なる挑戦の背景に先輩諸氏による80年の歴史と伝統があることをあらためて感じている。

アートマイルプロジェクト自体は、ネット上での交流が中心であるが、学校によっては外国の方との直接交流の機会を持てる場合もある。プリンストン大学の学生は毎年石川県に日本語の研修に来ており、20人ほどの学生が1校に訪問する。うまくこの機会を生かすことができれば、英語や外国に対する好奇心を高め、自分の思いが伝わった経験は児童の自尊心を高める事につながる。

○第3回研究会 9月6日（月）

- ・カナダIEARN世界大会参加報告（清水）
- ・掲示板書き込み実習、各校の取り組み

9月から交流が始まる時期に必要な事として、以下の点を確認。

- ① 交流相手に対する期待感を高めること、
 - ② 交流国に関わるゲストティーチャーの活用
 - ③ 英語での自己紹介の準備
 - ④ 先に贈り物をするなどの行動を起こすこと
 - ⑤ まず教師が相手校の教師と仲良くなること
- *カナダIEARN世界大会については本会報79号で報告済みのため割愛する。

○第4回研究会 10月4日（月）

- ・エジプトユース派遣事業報告（別頁参照）
- ・英語の自己紹介の方法の工夫

英語での自己紹介は、教師が見本を用意することで、児童は自分の名前や好きなものなど一部分をかえるだけで、英語で自己紹介カードを作成できるとする事例の報告があった。

○第5回研究会11月1日（月）

- ・停滞している交流の乗り切り方

相手からの返事がなく交流がとぎれてしまっているところが多く出てきた。相手の動きをずっと待っていると、交流学习を進めることができず、児童の意欲も下がってしまうのである。その解決方法として、交流の視点を自分のクラスの活動に移すことが話し合われた。

- ① 自律的に活動を進める
反応を待たずにできる活動にシフトする
- ② 児童に相手を意識させる工夫をする
相手の国を調べたり、ゲストティーチャーを活用したり目先を変えること
- ③ 相手にして欲しいことは先にする
待ちの姿勢ではなく、日本から積極的に働きかけることで相手の反応を引き出す

○第6回研究会12月6日（月）

- ・各校のTV会議の報告（10クラス）
- ・完成した絵の紹介

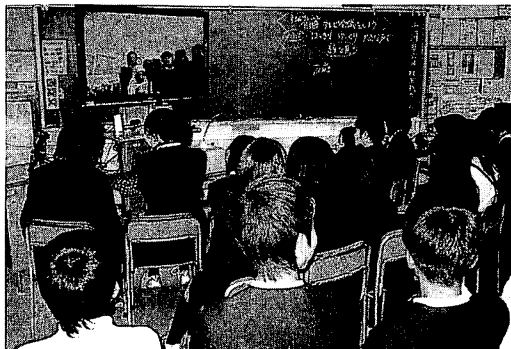


図2 四十万6年小東エルサレムとのTV会議

参加22クラスの内TV会議（skype）を実施したクラスは10クラス。複数回行ったところでは、1回目のTV会議はつながっただけで盛り上がるが、2回目以降は、児童の集中が途切れるという状況が報告された。話が高度な内容になってくると、自分の思いを分かりやすく伝えるための表現方法と、相手からの働きかけに対する反応をすぐに返せるか、相手の思いを汲み取ろうとするクラス全体としての姿勢が持てるか、などが重要になってくる。

順調に進んだところは12月末で、絵を完成させ、交流校に送ることになっている。それぞれ思いのこもった絵が完成したようである。

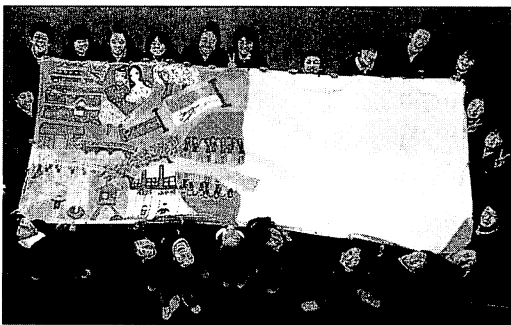


図3 浅野川小6年生の完成作品→台湾へ

○第7回研究会1月17日（月）

これまでの活動を振り返り、児童の変容や何が力としてついたのかを明らかにし、課題も含めて実践集のまとめ方についての話し合い。

○第8回研究会2月7日（月）

石川県教育工学研究会会(3月6日)の発表会について。

国語科教科書学習会 ～光村図書飯田編集長をお招きして～

白山市立湊小学校 中條 敏江

1 はじめに

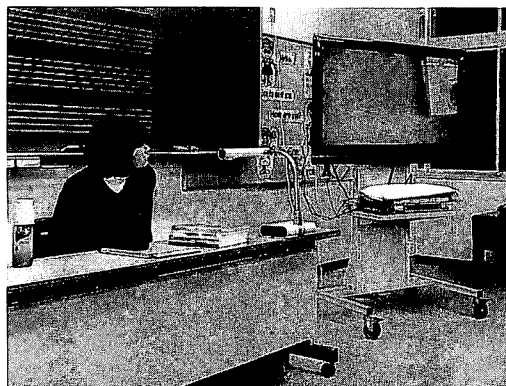
4月より新指導要領が実施される。どの教員も、今回の改訂では、基礎的基本的な知識・技能の習得にはどんな工夫がされているのだろう、また、習得したことを活用し思考力・判断力・表現力を育成するにはどうすればいいのだろうと気になっている。特に、全ての教科の言語活動の基になる国語科であるため、関心も高い。

石川県では50代の教員が教員全体の3分の2の割合を占めている。これからは今以上に若い経験の少ない教員ばかりの学校組織となる。これまでのように隣のベテランに教えてもらうこともなかなかできず、ゆっくり教材研究をする時間の余裕もないに違いない。きっと教科書をよく読みこんできちんと指導することが求められるだろう。また、教育課程を編成する主任たちも、若い人たちを指導するベテランとしても、教科書をよく理解することは必須であると考え、学習会を企画した。



飯田順子国語教科書編集長の講演は、昨年度よりさらに具体的な話を聞けるに違いないと、参加者は70名を超えた。飯田氏は、新しい教科書を示しながら、「言語活動の充実」「習得と活用」「伝統的な言語文化」の3つのキーワードで話された。その概要をご紹介します。

2 講演概要言語活動の充実



(1) 全体

教科書の質量ともに充実する必要があると議論され、教科書は分厚くなった。

3年生を例とすると、「読み」の単元は、間が空きすぎる反省から、1学期と2学期に単元を1つ増やしたため、年間5単元となった。また、「説明文」の単元は3年以上の学年では上巻に2教材並列の説明文を入れる構成とした。一つ目は見開きで全文が見渡せる説明文であり、二つ目は通常の長さの説明文を学ぶ構成にした。また、下巻にも冬休み後に説明文教材を入れた。

五年生以上は上下巻構成をやめた。1巻構成とし、子どもたちが自分で学習できることをめざした構成とし、教師の解釈がなくても、子どもたち自身が、教科書を読んで主体的に学習を進められるような構成とした。そのため、初めの「学習の見通しをもとう」に、全体像が見えるようにと学習のめあてと見通しを載せた。

(2) 言語活動の充実

学習指導要領の33の言語活動事例を取り入れるように文科省から指導があった。その数を気にすることなく、日常生活や将来の生活と授業でしていることをつなげて考える指導をする感覚で取り組みばよい。今回から指導事項を単元

名にあげるようにし、それを「手引き」に連動させ、読みの課題を課題1、言語活動の手引きを課題2というように構成し、「たいせつ」で指導の重点をpushした。また、「手引き」の最後に「本は友だち」で関連図書を例示して、子どもたちの読書が豊かになるように助けることを意図し、400冊の図書を紹介している。

話すこと・聞くことの単元では、それ自身が言語活動であるため、どんな知識を身につけさせ、どんな思考をさせるようにしたらよいかをチャート等で示し明らかにした。

さらに、吹き出しで質問があったり▼マークで問いかけを入れたり、子どもたちが自宅に帰って教科書を見ても学んだことが分かりやすくふりかえることができるようにしてある。

(3) 習得と活用

まずは、説明文の2教材並列構成である。次に、「学習構造一覧」を各学校に配布し、指導要領で求められる系統的指導がはっきりわかるようにし、既習事項が領域を超えても活用されることができるようにしてある。指導者がこれまで以上に意識して指導し、言葉や知識が繰り返し指導されるようにしてほしい。

学力調査B問題のように、自分の考えを書くことが求められている。読んで終わりではなく、読んだことに対して、「あなたはどう思いますか」を繰り返し問い、話し合っていくような学習が必要とされている。ただ考えましよう書きましようでは力にはつながらない。問われ続けないとなかなか考える習慣はつかない。そのため、考えをもつための手立てとしてノート書き方や、考えと理由のいいかたを「型」として示したりしている。

(4) 伝統的な言語文化

昔話や民話は伝統的な言語文化として我が国が誇るべきものとして、6年生まで「ふろく」として全ての学年に読み聞かせ教材を入れている。また、二年生の「いなばの白うさぎ」は書き下ろしの教材である。

三年生の「和歌・俳句」は声に出して楽しむ教材であり、解釈は必要がない。高学年でも、「声に出して楽しむ」ことをめあてに年間2単元を入れている。

「季節の言葉」では、音読・暗唱が目的ではなく、示された言葉や文をきっかけに身の回りを見つめなおす機会として意図してある。それを使ってTV会議で遠隔地の学校と身の回りを交流するなどいろいろな取組をしてほしいと願っている。6年間を通して、100編以上の短歌・俳句、70編以上の詩歌が紹介されている。たくさん和語に触れる機会として考えている。

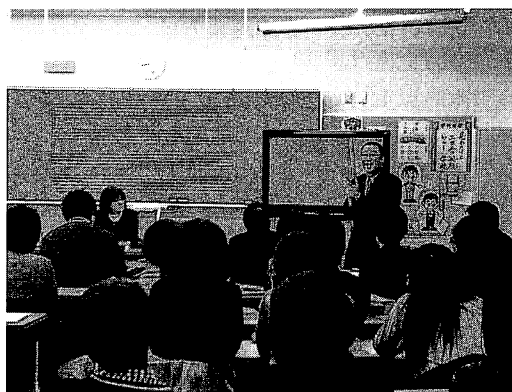
3 質疑

会場から大きく2つの質問があった。

一つ目は、例文の示され方とそのレベルについての質問であった。例文は全文示されていること、その記述をレベルとしてとらえるのではなく、文章の構成としての例示であることを大切にすることを教えて頂いた。

二つ目は、4年生の「新聞」に5W1Hがなくなった理由として、4年の「新聞」では「わりつけ」に特化し、高学年での「報道」の学習での「新聞」に5W1Hが入るようにしたとのことであった。

4 おわりに



終わりのあいさつでは、星陵大学の岡部教授に、光村図書の教科書の特徴は「支援情報」が豊富に記載されていることであり、日本語の学習だけでなくメディアに関わる学習も入ること、最終的にはクリティカルシンキングにつながることを教えて頂いた。そういう意味で今回は教育工学にふさわしい学習会であるとして、参加者に、平成24年11月9日の全国教育工学研究協議会への参加を呼び掛けてくださった。

新学習指導要領と教科書 ～算数 東京書籍～

野々市町立御園小学校 中野 淳子

1 はじめに

来年度より、いよいよ新学習指導要領が本格実施となる。算数科では内容は30%増、時間数は16%増となる。移行期間であるこの2年間、4年生は指導内容が膨大で時間が足りない、5年生では単位あたりの量、異分母の加・減法等、質的なハードルが高いなど、困惑した声が聞かれた。4月からは新しい教科書となる。どのように指導を工夫すれば児童に力をつけることができるのか、また、教育課程を編成するうえでどのようなことに留意をすればよいのかを明らかにすることは緊急の課題である。そこで、東京書籍算数教科書編集長の小笠原敏成氏をお迎えして、「新しい算数教科書編集の裏側」というテーマで講演を頂くことにした。

2 小笠原編集長講演より

(1) 新しい算数教科書の編集方針

① 数のよさやおもしろさを知る

日本の児童はできるのに、「算数嫌い」が多い。反対に欧米では、できないけれど好きという児童が多い。数のよさやおもしろさを感じられることを大切に編集している。

② 数学的な思考力・表現力を高める

児童のコミュニケーション能力の低下が問題となっている。どうしてそうなるかが説明できない児童が増えている。そのため、どの学年でも「考え説明する活動」が繰り返し求められている。

例1：5年生の三角形の内角を求める問題。この單元では、なぜ三角形の内角の和が180度になるのか、考えて説明できる児童を育ててはならない。しかし、鈍角三角形は敷き詰められないと感じる児童が多い。それを問い返すため、教科書では、鋭角三角形と鈍角三角形を提示している。さらに、次のページでは児童自身に書かせた三角形を使い考えさせていくように編集している。

例2：四角形の内角を求める問題。問いかけの側注に「既習を使って自分で考えてみよう」と記述した。三角形の内角の和が180度ということをもとに演繹的に考えることを示唆している。このように、児童に直接働きかける工夫も織り交ぜている。

友達の考えを説明させるような働きかけも大切である。どこまで求めるかは先生方のやり方による。教科書どおりに進めても、友達の考え方を説明させることができるように作られている。

教科書を閉じて、児童らの考えを出させ、互いに説明し合わせることもできるようにした。教科書内にある△・□・○のキャラクターは、先生の発問・突っ込みどころとして書いている。モデルの子どものセリフ（吹き出し）として入っているものは、重要な反応を引き出すことを意図して書かれている。上手に使う授業を組み立ててほしい。

教科書は基本的に1時間ごとの授業を想定しているが、「考えさせる」箇所は場合によっては2時間使えばよい。

③ 「できる・わかる・使える」を確実に身に着ける。

学んだことを使えるようになる児童を育てたいと考えて編集している。

(2) 「学び方のページ」の活用

1時間の授業で全員発言を目指すことは、内容の増加もあって、時間的に難しくなると思われる。発言できなかったとしても学習に参加したことを示すものとして、ノート指導がさらに重要になってくる。だからどの学年でもノートの書き方を示している。

教科書内のこれまでの「宇宙人」キャラクターを廃止して、○△□のような短時間でかける簡単なキャラクターに変えた。さっとノートに書いてふきだしのセリフを書かせるような取り組

みをしてほしい。キャラクターにつぶやかせてまとめを書かせることは、自分の思考を一步離れて見つめることになり、メタ認知につながっていく。

このようなノート指導のページが教科書の最初に入っているので、ノートの書き方のモデルとして是非活用してほしい。

1、2年生の場合は編集の仕方を変えている。1、2年生の場合は、考えさせるよりも「徹底して教える」ことが大切なことがある。繰り上がり繰り下がり計算などはその最たるもの。それができないと後で非常に苦勞をするような事項は徹底的に教えてほしい。

(3) 児童が苦手とする問題への対応

調査によると「 $8 \div 2$ になる問題はどれ？」というような問題の正答率がずっと低い。そのようなパターンの問題に慣れていない、教えられていない実態があるのではないか。

3年上のわり算の単元のように、ずっとわり算の計算が続くと、機械的にわり算を立式する癖がついてしまう。そこで、「 $8 \div 2$ になるのはどれ？」と問う問題を取り入れた。

同じく円と外接する正方形の問題がある。「一辺10センチの場合、半径は？」と問うているが、その半径を斜めに書いてあるのがミソ。同じ題材でも問い方を変えるだけで、児童の苦手な部分に働きかけることができる。

(4) デジタルコンテンツの利用

デジタルコンテンツもどんどん使ってほしい。来年度4月には当社サイトにデジタル動画コンテンツをアップする。作図の動画コンテンツを投影しながら、机間指導で個に応じた支援を行い、習熟の機会を増やすようにしてほしい。

(5) すべての児童にやさしい工夫

今回の改訂では、教科書の文章の改行ひとつにも目を配っている。特別支援の専門家に入ってもらい、説明や例示のしかたなども配慮を細かくしている。ページ番号の見せ方も、灰色に白抜き数字で6年間の教科書を統一している。

円と三角形の指導についても工夫している。30年前から円と三角形は同学年で扱い、関連付

けて学習できるようになった。最近の教科書はその関連づけが弱く感じられていたので、今回ははっきりさせるようにした。

(6) 確実な技能の定着

補充の問題も充実させ、いろいろな使い方ができるように工夫した。解答もつけて家庭学習で児童が自学できるようにした。ノートを見ながら、補充問題に自分で取り組めるようにと意図している。

早く課題が終わった児童への対応も考えている。早く終わる児童はほぼわかっている場合が多い。無理やり補充をさせると「嫌い」になるかもしれない。そこで、「友達と問題をつくり、問題を出し合おう」というように呼びかけて、簡単かつ楽しく取り組めるようにしている。

(7) 今年度は「発展」、来年度は「最低基準」

国際基準に合わせ、「リットル」は「L」に変更した。来年度からはそちらに統一されるので今年度中に児童に予告しておくといよい。

「かたちづくり」は来年度の2年生の教科書からは削除される。今の1年生は履修しないまま進級し、しきつめなどの図形の学習をすることになる。形を面・辺・点でとらえる大切な単元なので、できれば1年生で学習しておいてほしい。

4年生の桁数の多い 125×314 のような筆算。現行では $\times 3.14$ は計算機を使ってよいことになっているが、来年度は $\times 3.14$ は計算機でなく、筆算で求めなければならない。

このように今年度は「発展」として扱っているものも、来年度からは「最低基準」として扱われるものも多い。指導に十分な注意が必要になってくる。

3 おわりに

1冊の教科書に実に多くの工夫がなされているのだと実感した1時間半だった。今まで安易に身近な問題に変えたり、数値を変えたりすることがあったが、数値一つも様々な留意のもとに作られていることがわかった。今後は、それら教科書の意図するところを十分に踏まえて教材分析、授業設計を行っていきたい。

教育におけるICT最前線 —未来の学校の姿が見えてきた！—

金沢星稜大学 村井万寿夫

1. “フューチャースクール” はどうなるのか

昨年11月15日の行政刷新会議の事業仕分け第3弾で廃止判定を受けた「フューチャースクール推進事業」。現政権下において閣議決定して進められてきた事業ということもあり、廃止判定は大きなニュースになった。

推進事業の主体である総務省では廃止判定後の12月3日に「ICTを利活用した協働教育推進のための研究会（フューチャースクール推進事業の上部会議）」を開催し、後述するフューチャースクール推進事業東日本地域5小学校、同西日本地域5小学校の実証研究の報告を受けた。

会議の席上、先進諸外国のICT教育についても報告された。総務省はこれらの報告を受け、「フューチャースクール廃止は決定事項ではない」「内閣として責任をもって判断する」「現在実施中の10校には迷惑をかけないようにする」と答えた。

総務省は3週間後の12月24日に、フューチャースクール推進事業による教育分野におけるICT利活用の推進などを盛り込んだ「平成23年度総務省所管予算（案）の概要」を公開した。それによると、フューチャースクール推進事業実施校の校種等を一部拡充することを含め、10億6,000万円の予算計上を発表した。これにより、フューチャースクール推進事業は継続されることになった。

2. “フューチャースクール” の現状

東日本地域においては、石狩市立紅南小学校（北海道）、寒河江市立高松小学校（山形県）、葛飾区立本田小学校（東京都）、長野市立塩崎小学校（長野県）、内灘町立大根布小学校（石川県）の5小学校が実証校として取り組んでいる。

西日本地域の5小学校は、大府市立東山小学校（愛知県）、箕面市立萱野小学校（大阪府）、広島市立藤の木小学校（広島県）、東みよし町立足代小学校（徳島県）、佐賀市立西与賀小学校（佐賀県）である。

東日本地域5小学校におけるICT環境は次の通りである。

全児童と学級担任に対するタブレットパソコン（TPC）の配備のほかに、全普通教室へのインタラクティブ・ホワイトボード（IWB）の配備や、校舎内外で通信を行うための無線LAN環境の構築、校務支援やデジタル教材の管理、ポータルサイトやメーリングシステムなどの機能を、クラウド技術を使って提供する「協働教育プラットフォーム」（教育クラウド）を構築してある。

東日本地域を請け負うNTTコミュニケーションズでは、児童用のTPCとして東芝製のCM1を採用している。CM1は10.1インチ型の感圧式タッチパネル液晶を搭載し、重量が約1.8kgのWindowsパソコンで、本体全体がラバーコーティングされていて衝撃や振動に強いのが特長である（写真1）。

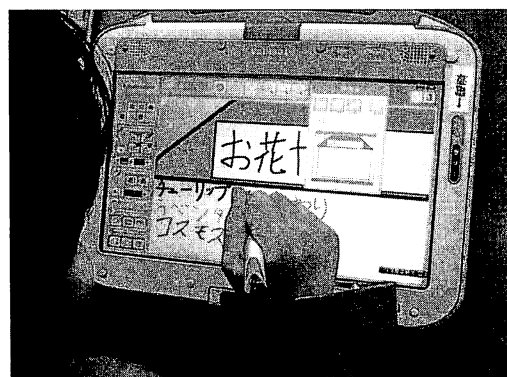


写真1 東芝製TPC（CM1）を使う児童

西日本地域を請け負う富士通総研では、児童用のTPCとして富士通製FMV-T8190のカスタムモデルを採用している。FMV-T8190は12.1インチ型の静電容量方式によるタッチパネル液晶を搭載し、重量が約1.9kgのWindowsパソコンで、CPUにCore 2 Duoを搭載していて様々な用途で快適に利用できるような高めのスペックが特長である。

3. 大根布小学校による実証授業

大根布小学校（夷藤一良校長）の全校児童数は529名で、すべての児童がTPCを持っている。最近ではランドセルにTPCを入れて家に持ち帰り、自宅での自主的な勉強にも取り組んでいる。

TPCを活用した授業の傾向（パターン）としては次のようなものが多い。

導入場面で本時の学習のめあてをつかむ。その後、展開場面においてはTPC使った「調べ活動」（社会など）、「表現活動」（国語など）、「操作活動」（算数など）を行う。そして、終末場面においてはそれぞれの結果を電子黒板で発表し合う。途中、展開場面において児童同士のインフォーマルな教え合いの姿が見え、フューチャースクール推進事業の一つのテーマである協働教育（ICTを使って児童が教え合い学び合う教育）が具現化されている（写真2）。

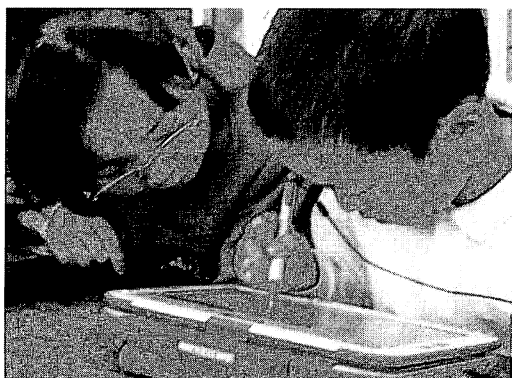


写真2 教え合っている男女の児童

実際の授業では、担任が中心となって授業を進めていくが、TPCや共有データなどの操作の仕方についてはICT支援員（各校に1名が専属配置）がサポートする（写真3）。

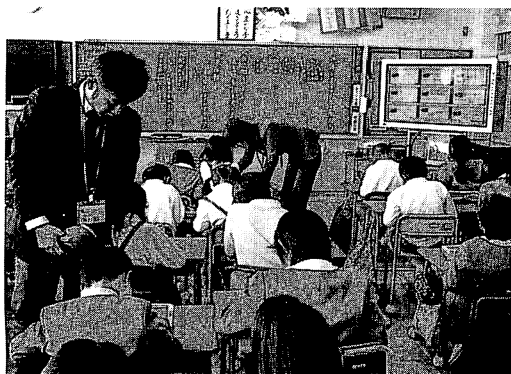


写真3 担任とICT支援員とのTT

大根布小学校においては担任とICT支援員の息はピッタリで、いつ参観してもTTによる授業を見ているようで、安心感がある。

また、大根布小学校では、ICT支援員が入らなくても担任一人によってICTを活用した授業を展開しており、すでに『日常化』の域に達しているといつてよい（写真4）。

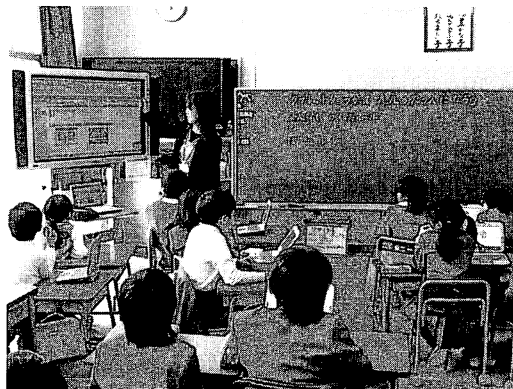


写真4 担任1人が授業をしている一場面

4. 総務省の新たな展開

総務省は、地域の雇用創出を目指した「地域雇用創造ICT絆プロジェクト」を2010年度補正予算に組み込んだ。

全国の市町村24地域46校小中学校を採択し、フューチャースクール推進事業と同等のICT環境を整備するとしている。ただし、小学校の場合は第3学年以上が対象となる。

石川県では内灘町立清湖小学校（上出雅校長）が採択され、この3月までに実証授業を行うことになっている。

5. 文科省との連携

2011年度のフューチャースクール推進事業は文科省と連携して進められていく方向である。そのため文科省においては2010年度補正予算によって『デジタル教科書』の開発事業を行うことにした。具体的には、小学校の国語、算数、外国語活動の授業に活用できるデジタル教科書を作成・普及することを目指している。

私は外国語活動のデジタル教科書の作成に携わることになり、その実証授業を大根布小学校で3月8日に行う予定である。

機会をとらえ、このことについても本紙面で報告したいと考えている。

平和の祭典「アートマイルMURAMID展」ユース派遣事業に参加して

金沢星稜大学 清水和久

1 はじめに

2010年9月18日(土)から9月24日(金)にかけて、JAPAN ARTMILE主催のアートマイルMURAMID展がエジプトのカイロで行われた。(http://www.artmile.jp/)これは外務省、文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、広島、長崎からも後援をうけた事業であり、日本全国から、中高生を中心としたユースを公募して行われた事業である。公募されたユースが非核平和の願いを日本で描かれたアートマイルの壁画を携えてエジプトの地で平和宣言を行った。筆者はこの事業に主催者側の一員として参加したので、この紙面を借りてその報告を行いたい。

本来ならこれまで世界各地で描かれたアートマイルの絵をピラミッド状の構造物の壁面に貼り付けて展示する予定であったが、資金不足のために今回は、ピラミッド型の構造物は模型にとどめ、別の会場にアートマイルの絵を飾り、平和宣言のみを行うこととなった。今後の資金調達いかんによってはピラミッド型構造物の展示が可能になるかもしれないが今のところ未知数である。

本事業内容としては、これまで国際交流で描かれたアートマイルの絵10枚を持参しカイロで開催すること、特に広島、長崎の高校生が描いた原爆を題材とした絵の説明と、その絵をバックにして日本のユースの平和宣言をおこなうことであった。なお、エジプト滞在中に三つのイベントを行った。

今回公募で集まったユースは中学生が2名、高校生が4名、大学生が2名であった。彼らは、平和に関する意見文を書き、選考の後選ばれた代表である。

2 日程

9月21日(火)

「国際平和dayにおける平和宣言」

アートマイルの原爆の壁画を通しての平和メッセージの発信

9月22日(水)

「ユースによる非核平和会議」
エジプトユースとの日本ユースとの交流
平和メッセージの発信

9月23日(木)

「日本大使館において平和宣言の実施」
平和のメッセージの発信

9月24日(金)

・Suzanne Mubaraku Secondary School
の教師との今後のアートマイルプロジェクト
の進め方についての懇談会

3. 事業の実施内容

(1) 「国際平和dayにおける平和宣言」

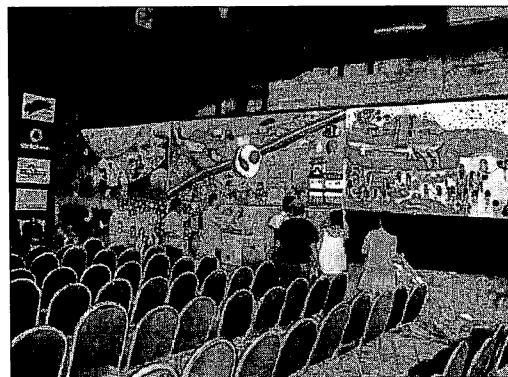


図1 会場に掲示されたアートマイルの絵

この会場で夜の10時からイベントが行われ、平和宣言を行った。フランスのアートマイル参加者やエジプトのアートマイル参加者も集まって、平和宣言を行った。また、この様子はインターネットのTV曲のピースTVがインターネット中継を行い、(http://www.peacetv.tv/)全世界に同時中継された。最近はマスメディアではないインターネットのTV局が中継を行うことが多くなっており、ビデオカメラとマイクとパソコンがあれば、すぐに中継ができるようである。この様子は日本にいる先生方にもリアルタイムで見ってもらうことができた。

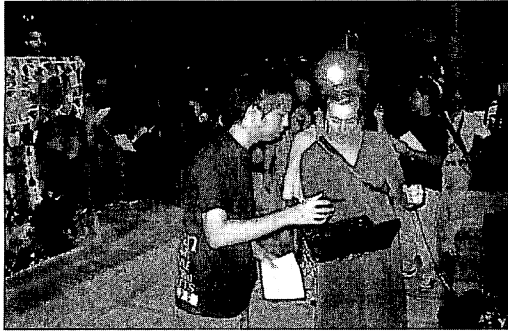


図2 peaceTVアナウンサーとの打ち合わせする日本のユース

(2) 「非核平和ユース会議」

エジプトの国際交流の組織である"E-era"と共催で開催。エジプトの同世代の若者と非核平和について話し合い、交流を深めた。

日本からは石川県でアートマイルを行っている先生方の平和メッセージビデオを会場で放映し、特に日本の小学校の学校生活の様子は興味を持って見られていた。



図3 日本のユースによる平和宣言

(3) 日本大使館での平和宣言

日本大使館においても同様の平和宣言を行い。持参した原爆の絵は大使館で行われる識者をあつめての平和会議においても掲示された。

4 まとめ

これらの平和宣言は一度も会ったことのない若者達がメール上で相談しながら作った文章である。被爆地でない者がほとんどであるが、彼らは、エジプトの若者と実際に交流することによって、対話と信頼の必要性をさらに強く感じたようである。アートマイルプロジェクトは、同世代の外国の友と本物の対話が始まるきっかけとなり得るものである。筆者は学校教育においてもさらに推進したいと考えている。

5 資料 平和宣言の内容 (実際の宣言は英文)

他人事ではいけない。

私たちに何ができるだろう。

NO MORE HIROSHIMA!

NO MORE NAGASAKI!

NO MORE HIBAKUSHA!

65年前、3千度を超える熱線で広島と長崎のまちは一瞬で壊れ、火の海となった。

20万以上の市民の命が、奪われてしまった。

黒こげで横たわる遺体や、全身が焼けただれた被爆者の写真を見るたびに胸が詰まる。

熱かっただろう、痛かっただろう。

さらに放射能は後遺症の原因となり、長い長い苦しみをもたらした。

核兵器はいらない。

でも、「バランス・オブ・パワー」の名目で、今も存在し続けている。

小型化され、使いやすくなったということだ。

人類は、沢山の命を奪う術を知っているのなら、沢山の命を救う術だって知っているはずなのに。

思いやりの心を持っているはずなのに。

核兵器を盾に脅し合っている世界が、戦争で傷つけ合っている世界が、平和な世界だと言えますか？

私たちは、そんな世界は望まない。私たちの願いは、核兵器を全廃すること。

被爆者の体験を風化させてはいけません。だから、私たちはここに立っている。

今こそ、行動の時だ。国籍、民族、言語や肌の色、宗教の違いを乗り越え、核兵器廃絶の願いとともに、私たちは必ず手を取り合える。

どんなにかすかな光でも、たくさん集めるとまぶしく感じられるように、

ひとりひとりの思いは小さくても、集まれば大きな力になる。

私たちの強い思いが、世界を変える。

悲しみのない世界を、武力ではなく「信頼と対話」によって共に築こう。

NO MORE HIROSHIMA!

NO MORE NAGASAKI!

NO MORE HIBAKUSHA!

今は小さな一歩でも、核なき未来への大きな一歩となると強く信じて。

2010年9月 エジプト

ジャパンアートマイル・ユース平和使節団

楽しさをバネにした活動を

金沢市立四十万小学校 坂上 則子

1 はじめに

今年度アートマイルプロジェクトに参加するにあたり目的を児童の実態から2つに絞った。1つめは英語力の向上、2つめは自主性を育てることである。子ども達は、3年生の時から英語活動を週1時間おこなってきている。しかし、英語を必要と感じたことがある児童はほとんどいない。6年生になり、中学校の英語教科書で文字指導も入ってくると、英語への苦手意識が出てきたり、英語は聞き取れないから嫌いだと感じたりする児童がふえてくる。外国の小学生との交流を通し、英語が通じた喜びをもとに英語学習への意欲を持ってもらいたいと思った。また、児童の実態として、指示されたことは出来るが、自分たちで計画を立て自主的に活動することができないことも気になっていた。

そこで、交流することの楽しさをバネにして子ども達の力を伸ばしていきたいと考えた。

2 交流を意識させるために

アートマイルプロジェクトは相手校と1枚の絵を完成させることにあるが、絵を描いている時期だけでなく、子ども達が交流相手を常に意識できるように2つの点に留意し活動を行った。1つめは1対1の交流になるように事前に名簿を交換しあい、交流相手を決定したこと。2つめはお互いにぬいぐるみを送りあい、ぬいぐるみを主とした日記をつけることである。こちらに送られた物は台湾からの留学生として扱い、児童が交代に毎日家に持ち帰り、日本文化体験や、日本の子どもの生活を体験させ、そのようすを写真に撮り、滞在日記を書くことにした。

3 実践の様子

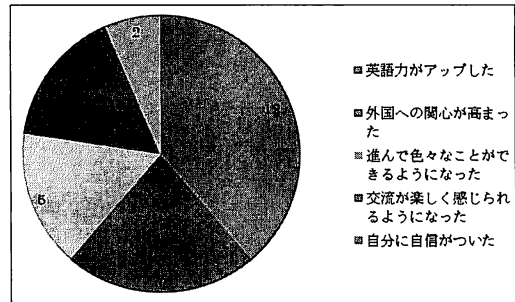
最初の教師との打ち合わせで、テレビ会議の回数と日時を相談した。時間的な制約もあり、3回のテレビ会議を行うこととした。全員が一度は話すこと、交流相手の児童が話したときは、必ず反応することを約束した。子ども達は外国との交流ということで最初は、戸惑っていたようだ。また、英語を話すということに抵抗があった児童も多かった。しかし、テレビ会議を最初にしたことで、交流への関心がぐっと高まったように感じる。英語が通じた喜びを味わうことも出来た。先日のジュニア英語検定でも、意欲が高い児童や間違っても常に発話しようという意識の高い児童が好結果であった。言語に関しては好奇心や関心がよい結果を生むのではない

かということを再認識できた。

絵の制作においても、子ども達は一生懸命に取り組んでいた。下書きは希望者が行うこととなり休日に2度学校へ来て描いた。色塗りは全員が交代でしたが、最後の点検や後始末は、数人の児童が自主的に行っていた。教師が働きかけなくても、自主的に動けるようになってきた。また、写真をもとに色を決めたり、色を作ったりという活動もみんなで相談し協力していた。実際に感想でも協力という2文字をあげてふり返る児童が多かった。大きな絵に取り組み、完成させたという満足感も大きかったようだ。

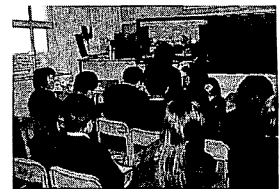
4 活動を通しての学び

(活動を通して自分が変わったと思うことのアンケート結果)



子ども達が交流で学んだことは3つあったのではないかと考える。子ども達のアンケートでもそれがわかる。

1つめは、英語を学ぶ意味を実感できたことである。初めは外国との交流に消極的だった児童も、もっと他の国の子ども達とも話してみたいと感じるようになってきた。2つめは、テレビ会議などを通して遠く離れた国の人たちともリアルタイムで交流できることを知ったことだと思う。そしてコミュニケーションというのは一方的な物ではなく、双方が意思表示をして成り立っていく物だと言うことが実感できた。3つめは、自主性である。絵の制作やテレビ会議の場面で進んで活動しようという姿がたくさん見られた。自主性を育てるためには、意欲を高めることが必要だということも実践を通して実感できた。



(テレビ会議の様子)

デジタル教科書と協働教育

金沢市立緑小学校 海道朋美

1 はじめに

2011年2月11日、日本教育メディア学会と金沢星稜大学総合研究所の共催による「デジタル教科書と協働教育」をテーマとした研究会が行われた。星稜大学稲置記念会館を会場に開催された研究会には、メディア教育研究者や現場教師、大学生など30名ほどの参加があった。

2 研究会のあらまし

(1) 基調講演「デジタル教科書の現在と未来」 光村図書出版(株) 黒川弘一氏

情報化社会における教育ツールとして2タイプのデジタル教科書が紹介された。「指導者用デジタル教科書」と「学習者用デジタル教科書」である。前者は、現在学校現場で導入が進みつつある、教師が中心的に使用する提示型教材である。授業をわかりやすくサポートするための教科書準拠教材であり教科書そのものではない。一方後者は、今後模索されていく検定教科書(国策)で、学習者1人1台の情報端末に対応したネットワーク型のものである。一斉学習だけでなく、個別学習や協働学習など様々な授業スタイルを想定して開発されているという。黒川氏は、学習者用デジタル教科書の活用について、「授業者の教育観が問われるのではないかと話す。それぞれのデジタル教科書の利点と今後の課題について講演は続いた。

(2) デジタル教科書活用模擬授業と意見交換 授業者 小林祐紀(金沢市立小坂小) 司会 清水和久(金沢星稜大学)

国語科4年「アップとルーズで伝える」(説明文)の読み取り場面。(図1)教科書の本文や写真を個別活用できるデジタル教科書の利点を生かして、まず拡大提示した写真からわかることを見つける。次に本文の読みと写真での発見を往復させることを通して内容の読み取りを充実させる授業であった。

意見交換では、従来の教科書とデジタル教科書のそれぞれの役割や、読む力を育むための挿絵と本文の活用の仕方などが話題となった。

(3) パネルディスカッション

～教室環境の創造と展望～

司会 岡部昌樹(金沢星稜大学)
指定討論者 黒田卓(富山大学)
パネラー 水越敏行(大阪大学名誉教授)
中川一史(放送大学)
村井万寿夫(金沢星稜大学)
小林祐紀(金沢市立小坂小)

水越、中川両氏からは、国内外の状況が報告された。電子黒板が教室にある学校では活用しない教師が減少していることや、大型デジタルTVを全教室に配置した地域では拡大提示装置としての活用が広がる実態から、道具としてこれらの機器が教室に普通に存在することの意義および効果が、その活用例とともに報告された。また村井氏の「フューチャースクール推進事業」(総務省)報告では、一人1台のPCを活用する授業の紹介と今後の方向性、さらに小林氏からは学校現場のICT機器活用の実態と取り組みの報告があった。

報告後の討論では、協働学習につながるICT機器の活用には、まず「空気」のように道具が身近にあること。そしてリーダー的「人」。さらには教師の「コラボ(協働の心)」がキーワードとして話された。

3 おわりに

黒川氏の「授業者の教育観が問われる」という言葉が心に残った。道具の可能性の広がりの中で教師自身の教育観を見つめ、そのための授業デザイン力を磨きたい。

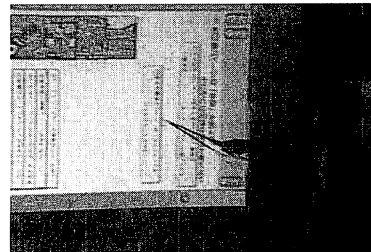


図1 模擬授業の様子

平成22年度 北陸三県教育工学研究大会 石川大会

主催 石川県教育工学研究会・金沢大学人間社会学域教育学類附属教育実践支援センター

- 1 開催日 平成23年3月6日(日)
- 2 会場 金沢大学人間社会学域教育学類附属教育実践支援センター
(〒920-1192 金沢市角間町 TEL076-264-5588)
- 3 日程

受付	挨拶	(1) 分科会 自由研究発表	[昼食] 理事会 12:20~13:20	(2) 全体会 学習会	
9:30	9:55	10:00	12:20	13:30	16:00

4 内容

- (1) 自由研究発表 10:00~12:20
会場 教育実践支援センター2階 教育実践研究室
座長 村井万寿夫(金沢星稷大学)

- 1) 活用型の授業を具体化するツールとしてのプロジェクター取付型電子黒板の活用
金沢市立小坂小学校 小林 祐 紀

本研究の目的は、活用型の授業を具体化するためのプロジェクター取付型電子黒板の活用方法を示すことである。国語科の説明的文章の指導において活用型の学習を志向した授業を実施した。その結果、プロジェクター取付型電子黒板を協同的な学習の場面で活用することで、児童の高い学習意欲、焦点化された発表などが確認できた。発表者だけでなく、聞き手の児童からも内容理解の容易さなどの評価が得られ、有用な活用例が示された。

- 2) 3年生書写における筆づかいの定着のためのコンテンツ活用
内灘町立清湖小学校 飯田 淳 一

小学校3年生の書写の学習で、筆づかいの定着を図るために、これまでの復習単元を設定し、デジタルコンテンツを活用した。自分で書きたい字を決め自分の手本を作り、書きたい字に必要な点画のデジタルコンテンツを選んで筆づかいを確かめながら練習させた。見るだけでなく手元の画面でコンテンツと一緒に筆を動かすことで、運動として点画のイメージをつかむことができ、ほとんどの児童の筆づかいに改善が見られた。

- 3) 「伝えたい」「学びたい」が学習者から生まれる、小学6年生英語学習活動の実践的研究
台湾との学校間交流学習による対話活動の促進
金沢市立浅野川小学校 西野 聡 子

小学校英語学習では、教科学習における対話とは質的に異なる活動が要求される。この対話の差異を、一次的ことば・二次的ことばの区分で捉え直し、授業外の発話活動の充実、国際交流学習の組み込み、という二つの手立てで、英語学習による話し手が伝えたい対話力向上を図る。これらの手立てにより、対話を行うための語彙力や文脈活用力が高まり、英語の学習時間だけでなく、他教科にわたり、児童同士による対話力が高まったという評価が得られた。

4) 大型テレビを用いたテレビ会議を通してのコミュニケーション能力の育成

金沢市立四十万小学校 余川 慶

文化的な交流が少なく、なじみの薄い遠く離れた国の子どもたちと、アートマイルの活動を通して交流する。テレビ会議という形で、自分たちの町や学校の紹介をしながら、質問したり答えたりするといったコミュニケーションを図る。また、会話の全てを英語で行い、これまでに学習している英語を使うことで、他国の人もコミュニケーションがとれることを体験する。お互いが用意したプログラムを見て、拍手を送ったり返事をしたり、温かい反応を返すというコミュニケーションをとることができた。この体験を通して、伝えたいことを短く簡潔に述べることに、相手の話すことの内容をくみ取りながら聞くことが大切だと気づき、聞き手を意識して話したり聞いたりする力がついた。

5) Inception-Exchange-Expression

～「わらしべ長者」式でより豊かに～

金沢市立木曳野小学校 角納 裕信

昨年度、表現力の育成過程でICTを活用しながら「発信→受信→交流」と対象を広げ、これらを繰り返す取り組みを行った。そうすることで、発信内容が豊かになり、さらに自信を深め、より大きな課題に対する意欲が湧き、良いスパイラルにつながる事がわかった。これを元に、今年度は違う学年・地域にも移植できるかどうかTV会議を中心とし、アートマイルの絵を仕上げ、交流相手国との国際理解・交流を行った。その結果、TV会議の回数を重ねるに連れてコミュニケーションの取り方も臨機応変に、より自然に反応を返すことになり、発信する事柄を積極的に作り出そう、生みだそうとする姿が見られるようになった。

6) 国際交流学習実現のための留意点～国際交流学習研究会を通して～

金沢星稜大学 清水 和久

小学校現場において国際交流学習に取り組もうとする場合には、たくさんの壁があり実現にこぎつけるのは困難であるというイメージがある。そこで国際交流に関する研究会を開催し、国際交流を行う参加者に対して理論的実践的なサポートを行ってきた。結果、研究会において、先行事例の紹介や今後の実践の見通しを提示すること、他の教師と悩みや工夫点を共有することがプロジェクトを遂行する上で重要であり、さらに広めるためには参加者同士の情報交換がさらに必要であることがわかった。

(2) 全体会・学習会 13:30～16:00

テーマ：「今、求められる学力とは」

会場：教育実践支援センター2階 教育実践研究室

(1) 基調講演：加藤 隆弘（金沢大学）

「石川県『学びの指針12か条』策定の背景について

～全国学力調査石川県分三年間の分析から～

(2) シンポジウム「学校現場での学力向上の取り組み」

コーディネータ：細川 都司恵（金沢市立小坂小学校）

パネリスト： 中條 敏江（白山市立湊小学校）

濱田 美恵子（金沢市立四十万小学校）

八崎 和美（七尾市立天神山小学校）

平成22年度 石川県教育工学研究会事業報告

事業	期 日	概 要
1 総 会 理 事 会	5月30日(日) 23年3月6日(日)	平成22年度総会（於：金沢市教育プラザ富樫） ・平成21年度事業報告・決算報告 ・平成22年度事業計画・予算案 平成22年度理事会（於：金沢大学） ・平成22年度事業報告・決算中間報告 ・平成23年度事業計画・予算案 ・平成23年度役員案
2 研究事業	5月30日(日) 6月12日(土) 7月20日(火) 8月7日(土) 10月19日(金) 20日(土) 11月15日(月) 12月2日(木) 2月11日(金) 2月13日(日) 3月6日(日)	○講演会・学習会「電子黒板が教室にやってきた」 会場：金沢市教育プラザ富樫 20名参加 ○学習会 「国際交流学習で付けたい子どもの力とは」 会場：金沢星稜大学 20名参加 ○講演会・学習会「教育実践を研究まで高める方法」 会場：金沢市教育プラザ富樫 20名参加 ○夏の研究会「映像と言語の往復から生まれる豊かな学び」 会場：近江町市場一番館 100名参加 共催：デジタル表現研究会 ○第36回全日本教育工学研究協議会全国大会(新潟県) 会場：上越教育大学 7名発表 ○学習会（白山支部）「新しい算数教科書編集の裏側」 会場：野々市町立御園小学校 30名参加 ○学習会（白山支部）「新しい国語教科書編集の裏側」 会場：野々市町立御園小学校 30名参加 ○冬の研究会「デジタル教科書と協働教育」 会場：星稜大学 30名参加 共催：日本教育メディア学会 ○平成22年度北陸3県教育工学研究大会 会場：福井大学 7名発表 ○石川県教育工学研究大会 会場：金沢大学
3 刊行事業	4月、6月、8月、 10月、12月、3月 7月、3月 3月	○研究会ニュース 年間を通じ当会 Web サイト http://i-kougaku.undo.jp/ にてニュースを掲載しています。 ○会報（79号、80号、B5版、24頁、200部） ○第36号研究紀要（A4版、48頁、200部）

編 集 後 記

今年も日本教育工学協議会で多くの会員の方が発表しました。また新学習指導要領実施に向けた学習会や最新の情報機器の効果的活用など、時代を捉えた研究活動も多く行われました。変化する時代の中で互いの授業観を交流し高め合えるよう、今後も様々な報告を取り上げたいと思います。

お忙しい中、執筆頂いた先生方、本当にありがとうございました。
(会報担当)

会費納入についてのお願い

研究会の円滑な運営のため、会費納入を
お願いします。 年額 3,000円

振込先 北國銀行 高尾支店 普通 110292

平成23年3月3日発行

発行者 石川県教育工学研究会
代表者 岡部 昌樹
事務局 〒920-1192 金沢市角間町
金沢大学人間社会学域学校教育学類
附属教育実践支援センター
TEL 264-5588 FAX 264-5589
印刷所 ㈱小林太一印刷所
TEL 238-5454 FAX 238-5453